

祖母から孫へ！伝統の「十川泉貨紙」が時を越え継承！！

清流通信読者の皆様こんにちは！さて突然ですが泉貨紙という和紙をご存じでしょうか？約400年前に愛媛県野村地方で誕生した楮が原料の和紙で2枚を貼り合わせ1枚に仕上げるのが特長。丈夫で美しい光沢をもっています。今回の清流通信は四万十町十川でその愛媛の泉貨紙の流れを汲み昭和初期にはこの地方で農家の冬の仕事として盛んに作られていた十川泉貨紙の制作に取り組んでいる若き紙漉職人、平野直人さんの紹介です。

5月10日の高知新聞夕刊でも素晴らしいリポートが掲載されていましたが、直人さんは1986年生まれの22歳。亡くなった祖母がやっていた和紙作りに興味があり中学校3年の時にはすでに十川泉貨紙の職人になると心に決め、高校へ入ってからの進路指導でもはっきりとそう答えていたそうです。なぜ直人さんが紙漉職人という道を選んだのか。元々手先が器用で物作りが大好きだったということと、祖母の作る泉貨紙に惚れ込んだ東京の手漉き紙専門店、紙舗直の代表でその世界では有名な坂本直昭氏の存在がありました。氏は直之さんが泉貨紙を作る事を心から喜び、そして祖母の紙を知るものとして、また紙の世界のプロとして、厳しくも暖かい助言をくれているとのこと。そしてまた高校卒業後すぐに泉貨紙作りの研究と修行に取り組めたのは、直人さんの決意を信じたご両親もまた同じように決断したからです。彼が大学進学を希望した時のために用意していた資金で宅地を購入し、大工である父親が工房を建て紙漉道具までも制作しました。それから2年、色々と試行錯誤や失敗を繰り返し、やっとの事で売り物になる紙を作ることができるようになったとのこと。

そしてこの冬には5千枚もの十川泉貨紙を一人で仕上げました。

取材をした22日、紙漉のシーズンとしてはもう終わりとの事でしたが、わざわざ材料を用意し、実際に紙を漉くところを見せてくれました。

軽快軽妙に紙を漉き、泉貨紙独特の2枚を一瞬のうちに貼り合わせていく工程は素人目に見てもすごい技術だと感じました。

四万十川が流れる四万十町に誕生(復活)した若き紙漉職人とそのご家族に心からのエールを送りたいと思います。



↑ 四万十町大井川にある平野さんの工房



↑ 出荷を待つ十川泉貨紙



↑ 直人さん(左)と、最大の理解者、とっても明るい母親の信子さん(右)



↑ 楮を水でさらし煮て砕いて繊維をほぐし細かいゴミを取ったものを漉き桶に投入し、さらに粘剤(ネリ)を入れてよく混ぜる。



↑ いよいよ紙漉。均等になるように手際よく原料を流し、できた紙を一瞬のうちに貼り合わせ仕上げる様子は、まさに神(紙?)業！